
影踏一カゲフミー

櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影踏―カゲフミ―

【Nコード】

N3721L

【作者名】

櫻

【あらすじ】

猛暑が続く8月上旬。

花屋の定員で生計をたてていた青年 蒼井アオイ 竜カミは、ある本を見つけ
てしまう。

その本は、彼の本当の実家、聖槍院家セイソウインに伝わる禁書であった。

禁書に選ばれる、竜を含めた6人。

死神との生死をかけた戦いが、今始まる。

ホラーにしては弱いので、苦手な方でも大丈夫だと思います。

序章

『一人目……』

『二人目……』

『三人目……』

指を折りながら、その男は数える。

『四人目……』

『五人目……』

『六人目……』

黒の光沢ある、“新品”の様な燕尾服を着た男が、“数百年”ぶりに数を数えていた。
その指折りも復路を迎えたちょうど一回目、六人目で止まってしまった。
男はくっくつと、押し殺すように小さく笑つと、階下に広がる世界を見下ろした。

『役者八揃いマシタ』

薄い唇が微かに声を発した。

『たごあ…… “影踏”のSTARTーデス』

「一日目『赤い禁帯出の本』」

真夏の猛暑と嫌に照り付ける夏の陽射しは、外を歩く人間にとって邪魔でしかなかった。

8月上旬の今日の気温は、今年始まって以来の最高を記録し、外中関係なく設置された自販機の飲み物はほぼ売り切れ状態であった。某所のコンビニエンスストアでも飲料水が売り切れ、食物は売れ残るといふことが起こり、遅れて来た労働者達は水分補充危機に晒されていた。

しかし花はどうだろう。

花は人とは違い、この陽射しを嬉しがっているようだった。

「ありがとうございます」

微低音の、まだその年はいつていないだろう少年の声が辺りに響いた。

そこは色鮮やかな花屋であった。

店は開け放たれ開放感に包まれており、表には色とりどり大小様々な花が黒や青のバケツに生けられている。

「いらっしゃいませ」

再度少年らしき声が響いた。

店内のスライドガラスの中に保存されている花の様子を伺ながら、薄紫に染まった髪を揺らし少年が振り向いた。

日本人の顔立ちに濃い紅の瞳 カラーコンタクト が印象的な、好青年の雰囲気を漂わせている少年であった。

白いTシャツの上に青いエプロンを付けている。微かな笑みを浮かべて客であろう人を見た。

そして爽やかな微笑みも一瞬にして消え失せた。

「……………何だ、朱雀か。何しに来た？」

茶と黒の入り交じった、まだ幼さの残る顔が花を見つめていた。

その少年 朱雀 を見るなり、紅の瞳が細められた。

「何だよ、つれないなあ…神兄は」

「…俺は神じゃない、竜だ」

「どっちだって変わらないよ…」

ふて腐れ気味に呟いた朱雀は、薄紫の好青年 竜 に皮肉めいた視線を向けた。

二人はひとしきり睨み合い、そして止めた。

無駄な時間だと、事だと分かったからだだった。

竜はスライドガラスを閉めてから、奥にあるカウンターへと向かった。

朱雀は気にも止めず辺りの花を見回す。

「…用がないならさっさと帰れ」

「本当につれないな…兄さんは」

「兄弟の縁はとうの昔に切ったし、俺は家を出たんだ。もう関係ない」

何ごともなくただ淡々と紡がれる言葉は、感情が抜け落ちたような印象を感じさせるものだった。

朱雀は小さく舌打ちをして、表情を柔らかくした。

「……兄さん、家に戻って来る気はないの？」

僕たちは双子だけど、兄さんは我が聖槍院財閥の跡取りなんだからさ……今ならまだ」

「戻る気はない」

無邪気さを装いながら明るく言う朱雀に対し、竜は冷静に呟いた。その言葉は、はっきりと朱雀の耳に届いた。

一瞬鋭い視線が竜を捕らえる。

しかしそれは本当に一瞬のことで、次の瞬間には跡形もなく消え失せていた。

「……しょうがないなあ。

なら、兄さんは本当に帰ってこないんだね？」

「同じ事を何度も言わせるな」

「了解」

それだけ言うと、朱雀は竜に背を向けて店を出ようとした。

たっ…

「……………」

たっ…

「……………」

ぴたっ

歩を進めていた少年の足が、急に止まった。

「……………まだ何か用があるのか？」

竜は振り向く事なく言葉を紡いだ。

目の前の作業の方が大事と言わんばかりに、弟である朱雀には目もくれず、花を取り包んでいた。

朱雀は兄と相對する紺碧の瞳を細め、不適に笑いながら、不可思議な事を口にした。

「神兄…僕は神兄が本当に好きだよ。」

だから、気をつけてね……」一拍おいて、その言葉は唄われるように囁かれた。

「“影”に喰われないように……」

そうして朱雀は店を後にした。

その場には、花屋には似つかわしくない、不穏な空気が漂っていた。

：：*：*：*：*：*：*：*：*

「お疲れ様、いつもありがとうございます！蒼井あおいさん」

「いや…良いんですよ」

竜はこの花屋『小百合・コユリ・』でアルバイトをしている、中卒の18歳である。

彼はある事件以来、日本有数の重工業会社である聖槍院家から身を引き、一人で生活をしていた。

いきなり飛び出したため勿論資金も何もなく、必死にアルバイトを

探すが、中卒という重りが仕事を探す邪魔になっていた。
そんな時に竜を拾いあげてくれたのが、この小百合財閥のご令嬢と
呼ばれる、小百合麗華であった。

「じゃあ、今日は私のおごりで…何か食べに行こうか！」

「いえ…そんな…ご迷惑になり「ならない!」」

言葉を遮られ、竜は一瞬身を引いた。

どうしてもこの少女にはかなわないと、竜は苦笑をもらす。

「ふう…仕方ありませんね。

わかりました、お受け致します」

「そうこなくっちゃ！」

麗華は笑顔で言うと、竜の手を引いて店を出ようとした。

その時。

店の入口から、人の気配がした。

時刻は既に9時を周り、店はとうに閉まっている。竜は麗華に言っ

て手を放してもらい、気配がする入口へと向かった。
花が並ぶスライドガラスの横を通り、少し薄暗い通路の先に、一つ
の影を見つけた。

そこには、月明りを背景に、紺碧の髪をなびかせる美しい女性が立
っていた。

つい竜は見とれてしまった。

まるでこの世の者ではないような、よく言われる『絶世の美女』と
いう言葉が本当に似合う女性であった。

すると女性がこちらに気付いたのか、静かな物言いで話しかけてき
た。

「あの……もう、閉まってしまいましたか？」

その声に酔い痴れながら、竜は慌てて答えた。

「あ、えっと……すみません。今日の営業は済んでしまっていて……」

「そうですね……」

残念そうに笑うその女性が何だか悲しそうに見えて、竜は麗華に胸中で謝りながらこう言った。

「何か…お探しですか？」

「ええ…今日お祖父さまの誕生日なんです。

だからお祖父さまのお好きな花を、探しに来たのですが……」

「なら、お包みますよ」

女性は一瞬ためらったが、直ぐに嬉しそうな微笑みを浮かべた。

「なら…お願いします」

「はい」

竜は小さく微笑むと、スライドガラスの方へと向かう。

そして女性に向き直った。

「何の花ですか？」

電気を付けてカウンターから鍵を取り、スライドガラスを開け放つ。様々な花たちの香りが一面に広がった。

「はい…センニチコウを包んで下さい」

「センニチコウですか…いい花ですよ、あれは」

竜は嬉しそうにそう言いながら、スライドガラスの中から濃い桃色の花を数本取り出した。

センニチコウとは漢字で『千日紅』と書き、名のとおり長く生きる花である。

8月下旬の誕生花で、鮮やかな細長めの球体を描く無数の花びらは、濃い桃色をしている。
春に咲きそうな外見を持つ夏の花であった。

竜は数本のセンニチコウをペーパーの上に乗せ、痛まないよう優しく包んでいく。

その作業を静かに見つめていた女性は、まるで感心したように竜を見つめた。

「凄い…ここまで花を優しく包む人は、私初めて見ました」

「ありがとうございます」

俺にとって花は人と同じですから…それより、優しいのは貴女の方だ」

「私…ですか？」

女性は驚いたように竜を見返した。
美しい大人の顔が幼く見えた。

「センニチコウの花言葉は“変わらぬ愛情”…

そのお祖父さまのことを、とても大切に思っている証拠です」

「ありがとうございます」

ふんわり微笑む女性に気恥ずかしさを感じ、竜は作業に集中した。
花を包み終わるのに、そう時間はかからなかった。

「本当にありがとうございます」

「いえ…お祖父さまに宜しくお伝えください」

女性はセンニチコウの花束を抱えて、嬉しそうに笑った。

「では…」

「あの…！」

竜は背を向ける女性を見て、つい呼び止めてしまう。

「はい…？」

「あの…宜しければ、お名前を」

その言葉を聞いた女性は、柔らかく微笑み、唄うように紡いだ。

「私は竜ヶ崎りゅうがきまが 澪です」

「俺は…蒼井 竜です。」

宜しければ、また来てください」

「はい。そうさせていただきます」

女性 澪 は横顔を月明り照らされながら、入口の扉を潜って外に出ようとした。

しかしそこで、はたと動きが止まる。

竜は不思議になり尋ねてみた。

「どうか…しましたか？」

「あの…この本は貴方のですか？
こちらに落ちていたんですが……」

澁はその場に屈んで何かを手に取る。

紡がれる言葉からして本なのだろうが、竜には心当たりがなかった。

「どんな本ですか？見せてください」

「はい」

澁は振り向いて手にした本を竜に手渡した。

そこで竜は凍り付き、本を落としてしまった。

竜にとって、その本は忌まわしきものだった。

「どうして、この本が……」

落ちた本は反動で表紙が開いていた。

何も書かれていない、白紙のページが顔を覗かせていた。

澁は表情を曇らせる。

「何か：問題のある本なんですか？」

「……あ、いえ！」

竜ヶ崎さんは気にしないで下さい」

苦笑気味に言い、手を振った。

澪が気にしないように。

自分の知っていることを、否定するように。

竜は急いで本を閉じようとした。

彼はこの本が何なのか知っていたからだ。

(これは……やはり“禁書”)

先程落ちる寸前、そして澪が手渡してくれた時、背表紙に赤い『禁帯出』の文字があったことを思い出す。

(赤い禁帯出の本……)

聖槍院家に昔から伝わる、死神召喚の本)

詳しいことは分からないが、これが実在することは、今亡き母から聞いていた。

それが何故、聖槍院家にあるのか、何のために作られたものなのかも、現状ではまったく分かっていなかった。
しかしこの本に対して、必ず守らなければならないことがある。

“外に出してはいけない”

竜は血の気が引いていくような、不快な感覚を覚えた。

(急いで本を閉じなければ……)

そう思いなおして、竜は地に落ちた本を拾い上げるために手を伸ばした。

そして本に触れる寸前、動きが止まった。

室内の蛍光灯が怪しく点滅する。

そしてヴヴッ…と唸りを上げてから、ブツンツといっきに落ちた。月明りに支配される部屋の中央で、二人は沈黙したまま動かなかった。

た。

いや、“動けなかった”

まるでこの場所だけ空間が切り離されたような不快感と、今の自分の状況が分からない不安が、二人の心を蝕んでいった。現状が把握できない。

これは心霊現象？

ポルターガイスト？

それとも…

“死神召喚”？

竜の表情から恐怖が浮かび上がった。

もし悪魔が召喚されるならば、自分達には何もできない。

できるはずがない

(早く…本をつ！！)

金縛りにかかったように動かない自分の腕を、身体を、竜は渾身の力で動かそうとした。
徐々に動いていく身体。

後少し……

後、もう少しでっ……！

そこで、また動きが止まる。
開かれたままの白紙のページ。
何の変哲もない、汚れのない白いページ。
そこに

じわじわと文字が浮かび上がったのだ。

「はっ……!!」

「っ……!!!?」

漣が小さく悲鳴を上げる。

赤黒い液体が、白紙のページの下から次々とわき出てくる。
竜の鼻をツーンとした臭いがおそった。

(鉄の……臭い!!?)

これにはさすがの竜も驚愕した。

「血…だと、言うのか…?」

血の気が引く顔を、恐怖に飲み込まれつつある心を、何とか理性でつなぎ止める。

しかしこれもいつまで保つか…。

『やっと…遊びノ時間デスか』

どこからともなく声がした。よく響く、低い声。

竜は辺りを見回した。

しかし自分達以外に誰もいないし、影すら見えない。

人間ならば、この月明りでも姿は捕らえられる筈だった。

しかし、気配はしていた。

「誰だっ…!?!」

叫ぶしかなかった。
自分達は今無力だ。
ならば、他に何ができる……？

『……………本を見ればわかります』

くっくつと押し殺すような声が、竜の不安を増幅させる。
そして目の前に落ちた本に、恐る恐る目を落とした。

「……………“影踏”……………STRAT？」

思考が働かない。
何のことなのか、何をすればいいのか、何を“望まれている”のか、
わからなかった。
声の主は姿を現すこともなく、ただただ怪しく笑いながら、静かに
唄った。

『アナタ達八選ばれたのデスよ……“彼ラ”と戦う“聖”に』

「……………“どう”……………ことだよ……………」

これまでの人生の中でも、こんなに危険を感じたことはない。
それは瀨も同様だった。

だからこそ、こんな場合の対策法をもっていないし、そのせいで恐怖が競り上がってくるのだった。竜は荒い息をつきながら、姿なき声に呟いた。

「……………“彼ら”って……………誰だ？」

その言葉は訊くべきではなかったと、竜は後悔した気がした。しかし声は素直に答えるのみだった。

『……………“彼ら”とは』

一拍置かれて発せられた、笑いを含んだ声。

『“死神”デス』

「……………“死…神”」

静が小さく囁いた。

声は震えている。

竜は本に目を落としたまま、今度こそ全てに後悔した。

（もしかして…俺が家を出たせいで？

まさか朱雀が……）

可能性としては、有り得ない話ではない。

しかし一卵性の双子として生まれた竜と朱雀は、どんな双子よりも相手のことをよく理解できていた。

「お前」

『質問ハそれ以上お止めクダさい。私が答えラレルのは、たった一つの質問ノミ……残りハその本ニ』

男の声はまた一つ笑うと、『御機嫌ヨウ……』と囁いて気配が消えた。その瞬間身体が軽くなり、蛍光灯が光を取り戻す。

二人は動けないまま、ただその場で、息を荒々しくしていた。白紙のページに浮かび上がっている、言葉が目に焼き付いた。

一
目
終
了

二日目 『一週間の有る期間』

よく考えたら、自分が家を出た理由など、どう考えてもくだらない理由^{モリ}だった。

今更後悔しても、何もかも遅い。

自分が出て行って一番辛いのは、双子の弟である朱雀のみだ。

そしてそのことが、自分に罪を与えた。

竜は、そう理解した。

二日目 『一週間の有る期間』

翌日、竜は自室で本を前に唸り声を上げていた。
理由は一つ。

その本に書かれている字、全てが英語だからだ。

義務教育のみ受けた竜にとって、それは辛いものの何物でもなかった。
独学で勉強した高等学校の英語文法を使っても、和訳は困難を強い
られた。

(頭痛くなる…つか痛い…)

額を押さえながら、ありとあらゆる英語辞書を机に広げ、何度もノ
ートの上に書き直す。
しかしこうといった、納得できる文にはならない。

「はぁ……」

溜め息も既に37回。

ついに自分の年齢の2倍を越えた。

「英語得意な奴いないかなあ〜…
あ、前いたな…：確か中学の時の同級生に」

竜は思い出すように、懐かしみを含んだ声で呟いた。

「あいつさえいればな…」

あの頃は良かった。

今更ながら、竜はそう実感した。
子供の頃は遊びだけが全てで、笑顔が絶えない日々だった。

しかし。

(俺は…知ってしまった)

知ってはならないことを、子供は知ってしまったのだ。

「……。やめた！」

思い出すのは止めよう……嫌なことまで思い出す」

そう言っつて、また英文に視線をやる。

やはり分からない。

そこで竜が、また頭を抱えた時だ。

ふと、その同級生の言葉が過ぎる。

『それ……？それは』

「あ、そっか！」

竜は閃いたようにすらすとペンを走らせた。そしてやっと、自分が納得のいく文になった。

しかし、その内容は残酷なものだった……

* : * : * : * : * : * : * : * : *

竜はとある喫茶店にやってきていた。
借りている一軒家のすぐ近くにある店だ。
そこで瀨と待ち合わせをしていた。

「こんにちは、蒼井さん」

「こんにちは、竜ヶ崎さん……
昨夜は大丈夫でしたか？」

その言葉にあの時のことを思い出したのか、瀨の表情が陰った。

それを見た竜は、申し訳なさそうに頭を下げると、前方の席を勧めた。

「それでは…本題に入ってください。

昨夜のことで呼び出されたのでしょうか？」

「はい……いや、そうだ。

昨夜の本のことで、話がしたかったんだ…解読が済んだから」

だからこそ、今日は仕事を休んで来たのだから。

「敬語…使わないでって言葉、覚えててくれたのね」

「そりゃ、忘れはしないさ

しかも昨夜のことだしね」

竜が苦笑をもらしながら言った。

昨夜帰り際に発した瀨の言葉が脳裏を過ぎる。

『私は確かに21で、貴方より年上よ。

でも、堅苦しい敬語は嫌いなの。だから』

「俺は竜ヶ崎さんに言われたこと、実践してるだけだよ」

「でも…名前では呼んでくれないようね」

澁が冗談混じりに、少しふくれた顔で言うと、竜は困ったように空
笑いをしてみせた。

「さすがに、それはまずい……
俺には勇気がないから……」

澁は名のとおり、静かに、おしとやかに笑った。
その動作がまさに大人の女という印象を植え付け、竜は見とれる自
分に一発喝をいれた。
勿論、心の中で。

「それはおいておいて……
………本題に入る」

「はい」

そう言って、竜は自分の鞆から昨夜見つけたあの“禁書”を取り出

した。

机に置かれた薄汚れの本は、まるで泥に落として乾いたような、黄ばんだ色をしていた。

背表紙には、赤い文字で『禁帯出』と掘られている。

竜はその本の表紙を開いた。

「……………！」

これは…英文？」

澁がみたものは、表紙の裏に隙間なくびっしりと書かれた、日本語ではなく英語であった。

「一体……………これは」

「ごめん、時間がないから…単刀直入に言う」

竜の真剣なまなざしに、澁は彼の目を一心に見つめた。

「これは“禁断の書物”…他には“聖殺しの書”や“悪魔召喚の書”とも言われている『禁帯出』の本なんだ」

竜の指が英文の一番上をなぞっていく。
その指はまるで呪文を綴るように、どこか神聖さが感じられた。

「この本は、この本文からして…“影踏”のルールが書いているらしい……」

「“影踏”って……あの、子供達がよく遊ぶあれなの？」

「それに“近い”」

竜は次の文に指を滑らせた。

「これは普通の影踏みじゃない……“死神”との“影踏”なんだ」

「“死神”って…昨夜あの声が出ていた？」

「ああ…多分そうだ。」

この本を最初に開いた者が、カードゲームでよく言われる“親”になる」

指は徐々に滑っていき、ある場所で止まる。

「ここには、こう書いてある。」

『最初にこの本を開きしもの、“聖なる剣”を持ちて、聖なる五人と共に“死神”を滅ぼさん』」

「では……蒼井さんが“聖なる剣”の持ち主と？」

「……残念ながら、そうなるな」

「なら……この聖なる五人というのは？」

「それは……よくわからないが、“影踏”には必ずこの“聖なる剣”を持つ者と、聖なる五人が必要のようだ」

竜は指を顎下に移動させ、何か考えるように小さく唸った。瀨はじつとその英文を見つめている。

そして、何かを見つけたように顔を上げた。

「あ……！」

「この英文……私読めるわ」

「本当ですか……！？」

「えっと……少し待って」

瀨は長い指を英文に滑らせ、唄うように、すらすらと英文を読み上げた。

「『聖なる剣』を持つ者は、一週間の有る期間が与えられ、その間に参加者とされる聖なる五人を探さなければならない。もし見つ

けられなかったら、“聖なる剣”を持つ者と聖なる五人は……“永
久の苦”が待っている』」

「あまり、いい言葉じゃ……ないみたいだな」

竜はあからさまに嫌そうな顔をした。
額を押さえ、溜め息をつく。

「とりあえず……その参加者を探さなきゃならないんだろうな。
それまでは普通の生活に戻ろう」

「はい」

そうして二人は別れた。
不安を抱いたまま。

有余期間終了まで、残り6日
聖なる五人、残り4人

三日月・聖花

三日月・聖花

翌日、竜は花屋の仕事に戻っていた。

昨日瀨と話してから、何か手掛かりがないかと思い英文を和訳しようとしたが、“何か”が竜の思考を止めていた。

何故か、和訳を強制的に止められているような、不快感があった。

そして仕方なく、仕事に戻ってきたのだ。

瀨に「普通の生活をしていよう」と言ってしまった限り、自分がそれを破ることは許されない、ということも理由の一つだが。

しかしあんなことがあった後だ、いつもどおり生活できたらそれこそ無神経だと思う。

「ありがとうございます」

いつもより幾分暗い表情になってしまい、胸中で喝をいれた。

(最近、自分に喝を入れすぎかな…)

そう考え、自分には本当に勇気がないと実感して溜め息が付いて出

る。

「どうしたの？蒼井さん…溜め息なんかついて」

「あ…いえ、気にしないで下さい。

ただ昨日、少し寝不足なだけですから……」

そう言ってもなかなか笑顔は作れない。

竜がまた溜め息をつくとき、麗華は言いにくそうに言葉を紡いできた。

「あの……お疲れのところ、悪いんだけど……。
ちよっと、相談があるの」

竜は少し意外に感じ、反応が遅れてしまった。

麗華は滅多に悩みを打ち明けない、一人で解決するタイプなのだ。

その麗華が、自分に相談を持ち掛けてきた。

それは竜にとって嬉しいことであり、同時に信頼されていることにも繋がった。

「俺でよろしければ、相談にのりますよ」

「そう？ありがとうございます！」

麗華は安心したような、そんな表情を浮かべた。

「で、相談とは？」

「あ、うん…ちょっとこっち来て」

そう言われ、竜は不思議そうに首を傾げた。
麗華は竜の手を引くと、他の店員に後を任せ、店の奥へと姿を消した。

* : * : * : * : * : * : * : *

沈黙を保ったまま、麗華は竜の手を引いていた。
本当ならこのまま、どこかにいきたい。
そんな気持ちが麗華をおそった。

これは“好意”なのかもしれない。

そう感じ始めたのは、竜を雇って一週間あまり。優しく、働き者の竜に、いつしか惹かれていた。しかしこの気持ちを打ち明けるわけにはいかなかった。何故かと言うと、竜が聖槍院財閥の跡取りだからだ。いくら縁を切ったとしても、その事実が変わらない。

(今はダメ……今は、まだ早すぎる)

麗華は自らの理性で心を縛り付けた。そしてそのことがバレないように、“満面の笑み”で竜に向き直る。

「あのね、大した相談じゃないの。ただ……ちょっと身に覚えがなくて」

「何がですか？」

竜が心配そうな表情で見つめてきた。

「あのね……これを、見てほしいの」

そう言つて、麗華は自らの服の襟を、思いつきり下に下げた。いきなりのことに竜は驚き、顔を赤面させて背けた。

「あ、いきなりごめんね。」

蒼井さん、ここ見て」

そう言われ恐る恐る視線を向けた。

麗華が指で示しているのは、胸のちょうど上あたり。

「み……見れませんよ……」

「大丈夫だから！」

麗華は業を煮やしたのか、竜の顔を片手で振り向かせた。勢いに任せて竜の顔が向きを変える。そして、視線がその場所を捕らえた。

「……！」

何ですか……？その痣みたいなの……」

「え……蒼井さん分らないの？
貴方の“左頬”にも似たようなものがあつたから、てっきり何か知
つているのかと……」

竜は左頬を指でなぞる。

気がつかなかつた、というのが正しい。

しかし朝から鏡は覗いた。
なら。

「今日の朝以降にできた痣……？」

「あ、私もそうなの」

麗華の顔をまじまじと見つめ、あることが頭を過ぎる。
澁には話さなかつたが、“禁書”の英文の中にあつたのだ。

『……参加者には、刻印が』

竜はその場に麗華を残して、走って家へと向かった。
参加者の手掛かりを見つけたのだった。

有余期間終了まで5日
聖なる五人残り3人

四日目・聖人

その日、漣は久しぶりに友人の霧島美咲きりしまみさきと会う予定でいた。共通の目標を持っていたからか、高校から大学まで一緒だ。そして現在も大学でよく一緒に過ごしていた。

しかし最近は家事が忙しいのか、顔を合わせる事が少なかった。彼女は結婚をしている。

仕事、家事、子育てといった三要素が揃ってしまっていた。

(今日は一体何の用で、私を呼び出したんだろう……)

漣は詳しい話を聞かされていなかった。

(とりあえず、行こう……)

考えても仕方がない。

漣は近くに置いてあった夏らしい籠のバッグを手に、サンダルを履いて家を出た。

美咲とは、家を出て近くの公園で待ち合わせをしていた。小さな噴水が据え付けられている、一般的な何の変哲もない公園だった。

澪が視線を向けた先、近くのベンチに美咲は座っていた。しかしその隣りに、小さな少年が座っていた。

年齢は11、2だろうか、黒い髪は真っ直ぐに下に落ちている、癖毛がないものだった。右目には眼帯が付けられている。

「美咲」

「あ、澪！久しぶり！」

「あの…その子は？」

「あ、澪合つのは初めてだったわね…」

紹介するわ。私の息子、惺せいよ。名前当て字だけどね」

笑いながら言う美咲を見てから、澪は少年 惺 を見つめた。

「え…この子、絶対12才ぐらいよね……」

「そう、12才よ」

そこで冷静になって考えてみた。

彼女、美咲は瀨と同じ21才、そして息子は12才の中学二年。どうやっても数が合わない。

混乱している瀨を見て、美咲は小さく笑った。

「あのね…旦那バツ1だって言わなかったっけ？

あの人の連れ子なの」

そう言われ納得ができた。

美咲は10才も年上の男性と結ばれ、バツ1である男性に連れ子がいたのだった。

だからこのような年の差親子が生まれたのだ。

「そう言えば、今日は何か用があったんじゃない？」

そう言われ美咲は思い当たったようにはっとした。

「そうそう、忘れるところだった。

夏休み中だけでいいんだけど…この子預かってほしいの」

瀨の思考が一瞬にして止まった。

「え……私が？」

「ダメかな？」

「ええ……！？」

声を上げた漣は、いつもの上品な女性とは思えない程だった。驚きすぎて開いた口が閉じない。

「私仕事が多いから、この子構ってあげられないの……だからお願い！ 惺も了承してくれたし、ね？」

美咲は必死に手を合わせて頭を下げてきた。

漣は慌てて頭を上げるように言ったが、美咲の頭はなかなか上がらない。そしてそんな美咲の隣りに座る少年は、ただ淡々とその成り行きを見守っていた。

(何故、この子は預けられることを了承したんだろう……)

漣の疑問はもつともだった。

彼女は惺と会ったこともなければ、話すら聞いたことがないに等しいぐらい、彼のことを知らない。

それと同じように、惺もまた、漣を知らない筈だった。

なのに、実の母ではないとは言え、母から離れて暮らすなど普通の

少年にできることだろうか。

「瀨……ダメ？」

美咲の言葉にはっとして惶から目を離す。

瀨はその時、初めてこの少年に興味を抱いた気がした。

「……………」。

わかった、預かるわ」

諦めたように、小さく笑いながら瀨は言った。

美咲の表情が晴れていった。

「ありがとう！」

やっぱり瀨は頼りになるよ……」

美咲にそう言われ、少なからず親友の役にたっていることが、瀨は嬉しく思った。

「なら、私今から仕事だから……後宜しくね！」

そう言い残して去って行く美咲に手を振り、瀨は少年に視線を移す。

夏だと言つのに汗一つかかず、ただ噴水を見つめている慍に、ます興味がわく。
まるでこの世のモノではないような。

「霧島君…宜しく願いします。至らないと思いますが……」

「……………敬語じゃなくて良いです。
それに貴方は母より“優れて”いる」

「え…………？」

唐突に発語したため、聞き逃しそうになりそうだった。

澁は小さく笑うと、慍を家に連れて帰ることにした。

「噴水…好きなの？」

隣りを歩く小さな少年の視線を追い、気になって訊いてみた。

「いや……………あそこ、“歪んでる”なって」

「え…………？」

澁が噴水に視線を向けた時だった。

携帯が鳴った。

P i r i r i r i . . .

「誰かな……」

静は噴水から視線を外し、肩から下げていたバッグから携帯を取り出した。

透き通るようなコバルトブルーの折り畳み式携帯を開いて、ディスプレイに映る文字を目で追う。

新着 蒼井 竜

「竜君……?」

それは竜からのメールであった。
先日喫茶店で会い、別れ際にアドレス交換したことを思い出す。

『何かあったり、わかったりしたら連絡するから』

その言葉を思い出して、そしてメールがきたことを考えて、瀨は嬉しくなった。

早速開いてみる。

本文は簡素に纏められていて、正直見やすくもあり、同時に味気無さも感じた。

瀨は一通り本文を読んでいく。

しかしその内容に問題があった。

最後まで読み終わると、慌ててバッグの中を探し始め、取り出した物は携帯用鏡。携帯同様折り畳み式なので、開かなければ自分は見えない。

瀨は一息ついて、いつきに鏡を開いた。

「……………!!!」

そこに写るのはいつもと変わらぬ自分の顔。

しかし一つだけ違った。

それは、先程きた竜からのメールにも関係あった。

『いきなりメールしてごめん…聖なる五人の手掛かりを見つけた。』

参加者は身体のどこかに、異なる刻印が浮き出るらしい。それは俺も同様だった。

昨日アルバイト先の店主に相談を持ち掛けられたよ…その内容が“

変な痣”ができている、というものだった。

俺自身も気付かなかったが、今現在、参加者全員に刻印が浮き出ている筈だ。

“禁書”を解読したら、それは“影踏”が終わる日まで浮き出たまらしい…

今はこれぐらいしかわからない、詳しく分かったらまたメールする』

鏡に写る自分の顔、前髪で多少は隠れている額のその中央に、刻印があつた。

それがまるで罪の証として付けられているような、罪悪感に心を震わせる。

「…………竜ヶ崎さんも、それがあつたの？」

「え…………？」

惺は表情を変えず、ただただ噴水を見つめながら、自らの右手甲を差し出した。

そこにあつたのは、刻印。

「僕も仲間みたいだ」

左目を怪しく輝かせて、惺は言った。

有余期間終了まで3日
聖なる五人残り2人

五日目・聖槍

五日目・聖槍

滞からそのメールがきたのは、メールを送ってそう時間がたたないぐらいだった。

内容を一通り確認してから、竜は一つ溜め息をつく。

「まさか：12才の少年までが“影踏”参加者だとは……信じがたいな」

それは、独り言にしては大きすぎる、不安を表した言葉だった。

現在分かっているのは、有余期間が一週間、参加者は全員で6人、

“死神”がいる、そして“悪魔”の音がすること、であった。

四つ目の“悪魔”は、憶測にしかすぎないが。

「残りは3日：残りは2人」

ここまでできて行き詰まる。

今迄のことを考えれば、何かしら竜と澁に関係のある人物が参加者として選ばれているが、これ以上は頭にすら浮かばなかった。

「……とりあえず、今は仕事。
できることを、やろう……」

あまり気乗りはしなかったが、しょうがないと無理矢理納得させ、竜は休憩時間を抜けた。

「……蒼井さん」

「小百合さん……」

「見つからないの？
他の参加者は……」

店の奥から出てきた竜を一瞥し、麗華が心配そうな表情で言葉をかけた。

参加者と判明した麗華にも、“禁書”や“影踏”の話をしてあった。

「……はい、なかなか見つかりません……。どうしても、後2人が見つからないんです」

「……もし、参加者が見つからなかったら……」

麗華が恐怖に身を震わせた。

竜は申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

彼女を巻き込んだのは自分、自分と知り合いでなければこんなことにはならなかった。

罪悪感に苛まれながら、それを認めざるをえないのだった。

二人して暗い表情をしていると、入口から靴音が聞こえた。

どうやらお客様のようで、二人は気持ちを入れ替えてから出迎えた。

「いらっしやいませ」

竜が微笑みながらそう言うと、歓喜の声が上がった。

「おお！久しぶりだな、竜！

会いたかったぜ」

気さくな声に一瞬動きを止めた。

誰かまったく分からなかった思考が、彼を認識する。

「海斗…海斗なのか!!?」

「おう！」

気さくな青年 海斗は、親指を立ててニコリと笑った。

最後に海斗と会ったのは、竜が家を出る直前だった。
3年ぶりの再会に、二人は話に夢中になる。

「海斗…よく分かったな。」

「何で俺の居場所が？」

「ああ…それは聖槍院弟から聞いたんだよ。」

「兄が寂しそうだから、たまには会いに行っちゃって下さいってな。」

「朱雀が……」

「何だかんだ言いながら、朱雀は竜のことをよく理解してくれていた。
両親よりも。」

「いやあ……しかし、本当に花屋でバイトしてたんだな…
仕事が見つかって良かったじゃないか！」

海斗は自分のことのように喜んでいた。

そのことが何よりも嬉しく感じて、竜は数日振りに心の底から笑った。

すると竜の横から顔を出したのは、先程からずっと話を聞いていた麗華であった。

「あの…蒼井さん、こちらの方は？」

「あ…すみません、あんまり懐かしくて話に夢中になってしまいました。
した。」

彼は紅海斗。くれないかいと俺が中学の時、よく遊んでいた友人です。

あの…英語が得意な奴がいるって話したでしょ？」

「君が、竜を拾ってくれた女の子？」

こんな奴拾ってくれて、ありがとうな」

「ああ…話は蒼さんからよく聞いています。

小百合麗華と申します、宜しくお願いします」

麗華の微笑みに笑い返し、海斗は一つ頭を下げた。

「そう言えば…一体何しに来たんだ？」

「あ、それがさ…」

疑問に海斗が答えようとした時、竜の背筋を何かが通り抜けた。

それは寒気、悪寒だった。

まるであの日の、“禁書”を開いてしまった時のような、ここだけ空間が違つような錯覚に陥る。

そしてそれが何を示すのか、竜はわかっていた。

「何か…寒気しねえ？」

「言われてみれば確かに……」

「……きた」

『え……？』

竜の意味不明な発語に、二人の声が重なった。しかし彼の意識は二人に向いておらず、ただ入口付近の暗く陰った場所を一心に見つめていた。

「竜……？」

「蒼井さん……」

“きた”って、まさかっ！

麗華の表情が恐怖に変わる。

と同時に。

『御機嫌ヨウ…“聖なる剣”ノ主人』

あの、低い“悪魔”の声が三人を包み込んだ。

竜は一瞬の内に身構えた。

麗華と海斗を庇うように、前に立って出た。

入口付近の暗く陰っている場所から、異様な寒気が漂う。

辺りを見回せば、先程までいた筈の店員や、客の姿がまったくなかった。

それが、この場が“異空間”だという証拠であった。

『参加者八、まだ揃っていないようですね……』

「……お前が“悪魔”か」

『……そういうコトになりマスね』

気配はあの日より濃く浮き出していた。

声も前回よりかなりはつきりと聞こえるが、未だ姿は見えない。

「有余期間は後2日の筈だが、何故俺達の前に来た？」

竜の問いに、“悪魔”は笑いながら言った。

『一応、才見知りおきをと思イまして……』

私八“悪魔”、あなた方ヲ導く者です』

「“悪魔”が…導く？」

竜が訝しげに見つめれば、“悪魔”　ロードはくっくっとして押し殺して笑った。

その光景に寒気を感じる。

『私八、数百年前からずっと“禁書”の番人として、“影踏”の執行をしてきました』

すると暗がりから一人の男が現れた。

黒い燕尾服を着込んだ、長身の男だった。

黒髪は濡れたように下に下がり、その灰色の瞳は全てを見透かすような印象を与えられた。

「執行…所謂“影踏”の管理者か」

『ご名答デス…やはり今迄出会った“聖なる剣”の持ち主の中で、貴方が一番優れている。』

蒼竜…いや、聖槍院神』

「……その名で呼ぶな」

竜は苛立たしげに男を睨み付けた。

まだ相手が危険じゃないか分からない以上、警戒は解かないつもり

であつた。

すると男が一步足を踏み出す。

そして

『今日はアナタにコトバを授けに参りマシタ』

「っ　！！！」

竜の目の前、濡れたような闇色の髪が付くか付かないかの距離に、“悪魔”の顔があつた。

普通に考えても数十歩は必要な距離を、“悪魔”は一步で縮めたのだ。

竜の心臓が早鐘をついて、荒い息が恐怖を表す。後ろの二人も同様で、身動き一つできなかつた。

『コトバヲ…受け取っていただけマスか？』

竜はただ頷くしかできなかった。

「おい、竜…これは一体……」

「何も言つな…今は、黙ってる」

竜は一筋の汗を流して、じつと至近距離　と言っても近過ぎて顔がぶれている　の相手を睨み付けた。警戒のまなざしだった。

しかしそんなもの、“悪魔”であるロードには関係はない。

『何もしませんヨ…』。

私ハ中立、アナタ方には手ヲ出せマせん』

「なら…早くコトバを言え！」

竜が怒鳴ると“悪魔”は一步身を引き、一つ頭を下げて言った。

『有余期間は後2日です…急いで見つけていたください』

「それだけか？」

竜が探るような目を向けてきたので、“悪魔”はさらに笑いながら言った。

『一応、仕事なので……これヲ言わなければ、私ハ、番人放棄になりマスから』

ただ笑い続けるロードが、怪しく不気味に見えた。竜は息を呑みながら、逃げずに恐怖と向き合う。

『では…本日ハこれで失礼致します』

そう言って、一歩後ろに下がった瞬間。

“悪魔”は自らの闇を引き連れ、暗がりへと姿を消した。

空間は戻り、人が次々と戻ってくる。

竜は荒い息をつきながら、まだ早鐘を打つ心臓を押さえ付けて息を吐いた。

後方を一瞥すれば、海斗が麗華を支えている。

「竜……この子を……」

「ああ……」

竜は海斗から麗華を預かると、気を失っている少女を抱えて奥に向かった。

「やっぱり……14才の小百合さんには、荷が重いみたいだ」

布団を敷いて横に寝かせた麗華の前髪を掻き分けてやりながら、竜はまたも罪悪感に駆られた。

「……一体、あれは何だったんだ？」

「それは……」

「わかった、話すよ……」

竜は海斗の方に向きを変え、二人は座って真剣なまなざしで話をした。

「じゃあ……その本は“あの時”の……？」

「ああ……俺達があの日、聖槍院が所有する神社で見た、不気味な『禁帯出』の本だ」

その不気味な本を指差しながら、竜は額を押さえた。海斗に事情を話し終わるまで、そう時間はかからなかった。

何せほとんどが分からず終いなから。

そして竜達は、分からないままも参加者を探していた。何か矛盾を感じてしまう。

「その本が…そんなに危ない本だったとは……」

「俺も気付かなかったよ……」

しかも本は“自分の意思”で俺のところに来たみたいだ……」

「………何でも有りってことか」

「そういうことだな」

二人して苦笑が洩れた。

そこで竜はあることに気付いた。

「そう言えばいつの忘れてたよ…
参加者には刻印が浮き出るんだ」

「え……」

その時あからさまに海斗の表情が変わった。

何か不安と恐怖が入り交じった、彼にしては珍しい表情であった。
竜の勘は鋭い。

「まさか…海斗？」

「……」

無言のまま立ち上がると、いきなり上着を脱ぎ始める海斗。
一体何事かと竜は慌てた。

「海斗…？」

「………見てみる」

上半身が露になった海斗が、そう言って指し示したのは腰。
左腰に指を向けたので、竜はその指を辿った。
そして行き着いた先には、衝撃的なものがあった。

「……!!」

「……俺も、参加者らしいな……」

そこにある刻印。

それは参加者の証。

海斗は苦しそうに、それでも笑って竜を見つめた。
ある意味、決意に満ちた瞳で。

有余期間終了まで後2日
聖なる五人残り1人

六日目・聖刀

六日目・聖刀

翌日、竜は現在いる参加者を招集した。

有余期間も残り2日を切っている今となつては、通常的生活などしてもいられない。

それが“聖なる剣”の持ち主である、賢き竜の選択であつた。

「全員いるか？」

「ええ…全員揃つたわ」

瀨が辺りを見回しながらそう言った。

皆が招集されたのは、この間竜と瀨が会つた喫茶店であつた。大体の者が場所を知っていたので、瀨と相談をしたのち、ここにしよう
と決めた。

「今日招集したのは言うまでもない…」

聖なる五人の残り1人を、探さなければならぬんだ」

「それって…見当がついてるんですか？」

12才にしてはもつともなことを言う惺に、竜は驚いて苦笑する。彼ら同士も対面するのは初めてで、緊張した面持ちがほとんどだが、惺だけは違った。冷静に、そして全てを見透かしたような、その左目で見つめられた。

「……残念ながら、見当はついていない」

「じゃあ、どうやって探すんだよ？」

海斗が慌てた様に声を上げた。

何に慌てているかも、大体見当がつく。

「わかってる…」

有余期間内に参加者を揃えなければ、何かが起こることは確かだ」

「だから…私と竜君が二手に別れて、皆はどちらかに付いてもらって探そうと思うの」

「蒼井さんと瀨さんの知り合いを虱潰しに探すんですね」

麗華が顎に手を当てて、考えるように言った。

竜は小さく溜め息をつきながら、頷いて見せた。

「そういうこと…」

「効率は悪いな…」

「しかしこの方法しかない」

惶の言葉を断ち切って、竜は決意のまなざしを全員に向けた。

「明日までが有余期間だ……まだ時間はある」

その場の全員が、竜を見つめた。

「必ず見つけ出して見せる」

竜の囁きと同時に、辺りから人が消えた。
この現象は。

「“悪魔”……ロードか」

名を呼ばれたからか、竜の声に答えるように姿を表したのは、闇を引き連れた燕尾服の男であった。

『御機嫌ヨウ：“聖なる剣”の持ち主ト聖なる五人の内の四人』

“悪魔” ロードの回りくどい言い方に、竜は苛つきを見せた。

この‘人の形をした人ではない存在’は、自分達が必死なのを見て、苦しんでいるのを見て、そんなに楽しいのだろうか。

竜は軽蔑という名の視線を向けた。

「何をしにきた…」

邪魔でもしに来たのか？」

『滅相もナイ……先日モ言いましたが、私ハあくまで中立の立場に
おります。』

アナタ方の邪魔などしませんよ』

「なら何をしにきた？」

またコトバか？」

『さすが神様…勘が鋭イ』

「黙れ」

くつくつと笑うロードを睨み付けるが、そんなものは意味など持たない。

竜はそのことを、誰よりも知っていた。

「用件はなんだ」

『怖い人ですネ…』

本日は有余期間が残り少ないので、才知らせに……』

「知らせ…ですか？」

澁が不思議そうに首を傾げた。

『ええ…アナタ方は、悠長に探してしておりますが、お早めにしな
いと……』

「すまないが、コトバはいらないようだ」

竜が鼻で笑うように、ロードを挑戦的な目で見つめた。

闇を連れだした燕尾服の男は、感心したように『ほう…』と声を出す。

竜は気にせず言葉紡ぐ。

「有る期間内に参加者を探せなければ、“永久の苦”が待っている…既に解読はすんでいる」

「そうだったの？蒼井さん…」

「はい…」

ただ、皆には話すのが早いと思ひまして…」

「一体いつの間に…」

「海斗が来てからだよ」

竜は目線を反らす海斗を一瞥し、再度ロードに視線を向けた。

「“永久の苦”…即ち“死なず、生きず”だ。死ぬことも、生きること許されない存在になる」

その口から紡がれた言葉は、まだ成長しきっていない精神には、とても辛いものだった。

「違うか…？」

『さすが…拍手喝采ですヨ、アナタ様の才能は』

「それだけなら、さっさと帰れ」

有無を言わせない物言いに肩を竦めたロードは、闇に姿を消そうと
した。

その時、ふと竜にのみ声が聞こえた。

『最後の一人ハ…アナタの直ぐ傍……』

竜は呆然とそこを見つめていた。

その後気を取り直して搜索を始めたが、やはりなかなか見つからな
い。

友人、親戚、恩師…見当もなくなただがむしやらに探し続け、刻一刻
と時計の針は進む。

そして夕日が半ば落ちた頃には、皆公園のベンチに座って疲れ切っ
ていた。

「なあ……まずいんじゃないか？」

「何が……」

海斗の言葉に答えたくない一心で、分からないふりをして聞き返した。

そんな竜の態度に多少苛つきながら、鋭い視線を向けた。

「……お前、今日はもう終わるんだぞ？」

明日中に探せなければ、俺達は“永久の苦”という存在になる……」

「わかってる」

「もしそうでもなったら、お前どうする気だ？」

「……分からない」

竜は顔を下に向けたまま動かなかった。

その表情は髪で隠れ伺うことはできない。

業を煮やした海斗は、竜の胸倉を掴み引き起こした。

「ふざけんなっ！

お前が…お前が、“禁書”なんて開かなければこんなことにはっ！

「！

「海斗さんやめてっ！……！」

夕暮れ時の人が少ない時間帯の公園に、瀨の悲痛な叫び声が響き渡った。

「瀨さん……」

「そつよ……瀨さんの言つとおりよ」

「確かに……蒼井さんは自分の意思で僕たちを巻き込んでない」

「そつだがっ……」

「海斗さん……竜君の顔、見てみなさい？」

そう言われ、海斗は恐る恐る視線を向けた。

「……！！？」

海斗が目にしたのは……

今迄に見たこともない、竜の悲痛な表情であった。

「竜っ……すまないっ」

海斗は泣きたくなった。

自分が“死なず、生きず”の存在になるのが恐ろしいから、それを隠すために、現実逃避をするために、そして自分は巻き込まれたと言っ被害妄想を押しつけて、竜に八つ当たりをした。責任を押しつけようとした。

海斗は今迄感じたことのない罪悪感に囚われた。

「すまないっ…すまない、竜っ！」

「別に、良いんだ…」

小さく、ほんの囁く程度に、泣きそうな声がした。

「……大丈夫だから」

竜は海斗を慰めるように、囁いた。
その時。

「神兄……？」

聞き慣れた、幼さの残る声。
竜は顔を上げて、声のした方に視線を向けた。
そこにいたのは…

「朱雀……？」

自分と瓜二つの顔、双子の弟である朱雀が、そこに立っていた。
そして朱雀の右頬に視線がいく。

「……………！」
朱雀……………まさか、お前がつ……………」

それは竜が一番恐れていたことだった。

家を出て朱雀に辛い思いをさせたのならば、このゲームは当然の罰だと考えていた。

拳句の果てには、朱雀自身が罰を与えたのだとすら考えた。

しかし違った。

このゲームは、元より関係なかったのだ。

「このゲームは…誰が参加者であっても、いいというのか？」

竜の呟きが、少し肌に冷たい風にかき消され、流れていった。

「……………お前も、参加者だったんだな……………」
朱雀

竜とまったくと言っていいほど似た顔の右頬には、まるで双子が相対するかのよう、竜とは別方向に刻印が刻まれていた。

有余期間終了まで後1日
聖なる五人、招集完了

八日目・最後の平穏な日々

夏にしてはまだ涼しいと言える、早朝5時。
竜は寝付けない自分に齒がみした。

(……………本当、俺は弱いな……………)

寝付けない、眠れない、眠気がこない。
本当ならば今一番睡眠が欲しいのに、竜はそれすら叶わない状況であつた。

寢床であるベッドから下りた竜は、締め切っていたカーテンを半分残して開けた。

既に日が登り始めていることが、夏の日の出の早さを物語る。

「……………早いけど、準備するか」

そう一人呟いた竜は、残りのカーテンをいつきに開いた。

* : * : * : * : * : * : * : * : *

「蒼井さん、寝坊ですよ？」

「す…すみません…」

現時刻は午前10時を回った頃。

竜は待ち合わせ場所である公園で、こっぴどく叱られていた。その原因を作ったのは、勿論竜自身なのだが。

「この大事な日に、寝坊なんて…竜最悪だよな」

「だから海斗…」

「蒼井さん、尊敬していたんですが…」

「霧島、誤解だっ」

「何が違っちゃって言うの？」

「そう言えば、神兄はいつも寝坊してたようなあ…」

「朱雀っ！」

「反省なさい」

「……………はい」

全員から言われる、重たい一言。
竜には精神的に辛いものだった。

「まあ…30分の遅刻ですが、許しましょう」

麗華が溜め息をつきながら竜を一瞥し、取り直すように皆に今日行く場所を教えた。

本日は有る期間最終日ということで、全員で遊びに出かけることにしていた。

と言っても食事に行くだけなのだが、竜は気恥ずかしいくらい楽しみにしていた。

だが早朝に起きた（実際は眠れなかった）せいで、準備をして疲れ切った体は限界にきて……………

そのまま爆睡に突入してしまったのだった。

（我ながら不覚…）

竜はそう思うことしかできなかった。

そうして、有余期間最終日は始まったのだった。

地下鉄を乗り継いで約30分、某所にある普通の店に6人で入った。そこは中華料理店のようで、何度か雑誌で見たことがある店であった。

「少し混んでいますね……」

「大丈夫よ、瀨さん。ちゃんと予約席とってるから」

辺りを見回す瀨を見て、麗華は微笑みながら言った。

「確かここって有名店だよな……」。

「予約だけでも数万はかかるっていう特別店」

「え……？」

朱雀が何気なく発った言葉は、何も知らない瀨と海斗には驚きものの、なにもでもなかった。
竜が慌てた様子で二人に説明する。

「小百合さんは、あの有名な“小百合財閥”の愛娘なんだよ。
だからここは」

「え……そうなの!?!
ならここ麗華の店って意味？」

「……しかし、そう言われれば納得できるわ」

瀨が「だからこんなに可愛い娘なのかしら」と優しく微笑みながら
言えば、麗華は頬を赤らめ前を歩き続ける。
海斗が茶化すように「照れんかって〜」と言えば、鋭い拳が顔面を
クリーンヒットした。
勿論支えてやるのは竜のみ。

「さあ、ここ席よ」

麗華に勧められ座ったのは、皆で囲める円卓の前。
それぞれ好きなどころに座って、食事会が始まった。

料理が次々と運ばれてくる。“小百合財閥”が中華料理だけでなく、まさかここまでとは、さすがの竜も知らなかった。
そのことが、実家の聖槍院と重なる。

(……父上、一体どうしていられるだろうか)

箸が止まってしまった竜の横顔を、朱雀は静かに見つめていた。

そんなこんなで時は少しずつだが過ぎていき、円卓上の料理はあつという間に無くなったのだった。

結局あれつきり、竜は料理に箸すら付けず止まっていた。

何か考え込んでいる竜を見た澁は、少し外に出ないかと竜を誘った。

「竜君……少し、外に出ない？」

「……別に構わないが」

竜はまだ我に帰れず、多少意識がないまま、無意識で瀧の後を追った。

そんな二人の後ろ姿が麗華の目に映る。

(……蒼井さん)

そしてその麗華の視線に気付いたのは、朱雀であった。悲しそうな、辛そうな瞳に、彼女の心を理解した。

麗華は竜に好意を抱いている。

朱雀は席から立ち上がると、麗華に手を差し出した。まるで彼女の視界から兄を遠ざけるように。

正午前の外は昼食時ということもあり会社員も多く、竜と瀨は人込みを避けて近くの公園にやってきた。

「ここは…とても小さいのね」

「ああ…この公園は噴水のあるあの公園と比べたら、確かに小さいな」

竜と瀨は夏の暑さが少しでも弱まればと、近くにあった木陰に入っ
た。

蝉の鳴き声が耳にとどき、劈くように響き続ける。

遙か遠くは層気楼のように、暑さに耐えられず歪んで見えていた。

二人は何を話すでもなく、ただその場の空気を、穏やかな空気を満喫していた。

「……………」

「……………竜君、もしかして皆がゲーム参加者になったの、自分のせいだっ
てまだ思ってる？」

「……………」

竜の肩が多少なりとも揺れた。

実際そうだった。

竜は未だ罪悪感に囚われていた。

麗華や竜、知り合いになったばかりの瀨や惺、拳句の果て双子の弟すら危険な目に合わせようとしている。

「……俺が、家を出たからっ」

「家………?」

その時しまったと気付いた。

慌てて口を押さえるが、既に遅かった。

「どづいづいと……?」

「それは……」

竜は躊躇したが、相手が瀨なので言うことを決意した。

「俺……重工業で有名な“聖槍院財閥”の現当主の長男なんだ」

「え…!？」

澁は口元を押さえて驚いた。

竜は罰が悪そうに顔を背けるが、尚も口は言葉を紡ぎ続ける。

「俺の本名は聖槍院 神……」

昔は何度か“ふざけた名前だな”ってからかわれた」

つい出てしまう乾いた笑い。

竜は自分を笑っていた。

昔の自分も、今の自分も、そう変わっていない。

勇気がなく、ドジで間抜けで、かっこつけているのは口調と名前だけ。

髪を染めたのも、カラーコンタクトを入れたのも、本当は“昔の自分”を塗りつぶして消してしまいたかったから。

結局、家を出ても何も変わらなかった。

泣きたくなつた。
悔しくて、悔しくて…泣きたくなつた。
拳を力強く握り締めた。

「……何故、家を出たの？」

ピタツ。竜の動きが完全に止まった。
不思議そうに顔を覗きこむ瀨。

「ごめん“瀨”……
それは言えない」

夏の暑い陽射しを浴びながら、子供達が遊ぶ声が聞こえてきた。

* : * : * : * : * : * : * : * : * : *

「何ですか？朱雀」

手を引かれて屋上に連れてこられた麗華は、黙ったままの朱雀に問い掛けた。

「いや……ただ、悲しそうな顔してたから……」

二、三步前に出ているため、朱雀の表情はわからなかった。

しかしその口調には戸惑いと、優しさが含まれていた。

麗華は一つ、くすりと笑って、朱雀に背中を合わせるようにその場に立った。

お互い顔が見えない状態に、朱雀は慌てた。

(……顔見えないから、相手の気持ちもわからないっ)

顔を見せてもらえない。

もしかして、自分は彼女を怒らせてしまったのか？

そう考えて、気持ちはますます焦るばかり。

そんな気持ちを見透かすように、麗華は空を見上げながら言った。

「分かってるんですけど？」
私が蒼井さんのこと好きなの……」

その言葉に肩が揺れた。

大きな揺れは、麗華の背中に伝わる。

「……蒼井さんは私のこと尊敬してるって言ってくれ。
でも、それは好意に繋がらない……」
わかるの。蒼さんが見つめる先には、澁さんしかいない」

背中越しに伝わる麗華の思い。

それが自分の双子の兄・竜へのものだと考えると、何も言えない不
甲斐ない自分に腹が立った。

朱雀は自覚していた。

自分は麗華に好意を抱いていると。

麗華の言葉は、今の朱雀の気持ちと酷似していた。だからこそ、慰めの言葉一つかけてやりたい。それが叶わない今の状況は、朱雀にとって辛いものだ。

「……俺が、代わりになるよ」

「え……？」

そして紡がれた言葉は、男としては相応しくない、乾いた言葉であった。

「俺が、兄さんの代わりになる。顔は一緒だし…君が傷つくのは見たくないから」

背中越しの乾いた告白。

それつきり朱雀は言葉を発することはなかった。ただ風に流されて、麗華の小さな声が耳に届いた。

「ありがとう…」

「……皆さん、まだまだ青春ですね」

「そうだな……」

円卓の前で上の空の海斗を一瞥した惺は、小さく溜め息をついて窓の外を見つめた。

「……皆、このゲームのせいで知り合った。

意外だよな……こんな短時間で気持ち近付くなんて」

「もしかしたら、これは“運命”なのかもしれない」

惺が何かを考えるように、言葉を紡ぐ。

しかし海斗はその考えを否定した。

「惺……この世に定められた“運命”なんて、存在しない」

海斗の有無を言わせない口調に、惺は海斗を見つめた。

言葉に似合わない目の色と不適な笑みは、何かの決意を示しているようだった。

(この人は…蒼井さんとはまた違う、“何か”を持っている)

まだ出会って数日だが、惺は確実に海斗に興味を示していた。

元よりあまり他人に興味や関心を持たない惺は、人との関わりを嫌っていた。

そんな惺が、初めてと言っていいほど、他人に興味を持った。そしてそんな自分を不思議に感じてしまうのだった。

「……心に刻んでおきます」

「よろしい」

海斗はニツコリ笑うと、惺の頭を一撫でした。

すると外から竜と漕が戻ってきた。

少し疲れ気味なのか、竜の顔色が優れない。

「大丈夫か？竜…」

「ああ…多分水分不足だろう…」

そう言って近くにあったグラスに水を注ぎ、いききに飲み干した。すると上階から麗華と朱雀が降りてきた。

「あ、神兄たち…戻ってきてたんだ」

「小百合さんに朱雀…二人でどこに？」

「別に…どこだっていいだろう!!？」

頬を赤らめながらグラスに手を出せば、竜がグラスを渡してくれた。その中には冷えた水が注がれている。

「ありがとう」

「双子だから、何でもわかるんだよ」

笑い合う二人。

その場の雰囲気緩和だ。

「………有余期間終了日」

ふと惶が呟いた言葉が、その場の全員に緊張感を与えた。朱雀はグラスの水を飲み干すと、卓上に戻してこう言った。

「……“死神”に影を踏まれたら、いけないんだよね？」

「一応、そういうことになっている」

竜は軽く考え込みながら答えた。

しかし朱雀は納得したような顔をしていない。

「でも…それだったら、俺達に二つ名を与える意味ないんじゃない？…どうせ抵抗できな」

「……もし、それが『死神』に対抗できる力』を示しているとしたら、納得できねえ？」

海斗の意外な言葉に全員の視線が彼を捕らえる。

その視線を気にするでもなく、海斗は腰まで長い一結びの黒髪を揺らし、席から立ち上がった。

「すまない、竜がいない間に“禁書”を解読しちゃった」

「……！お前って奴は……」

海斗はニツコリ嫌味たらしく笑うと、両手を胸ぐらいまで上げて、指を開いた。

右手三本、左手三本だ。

「左手の三本が“聖なる剣”の持ち主である竜と、俺と聖槍院弟、右手三本が俺達以外の三人だ」

そう言うってから、海斗は右手と左手を軽く離れた。
あくまで分かりやすくするためだ。

「基本的に、こう分かれる」

「……力がか？」

「簡単に言ったらそうだ。
でも強いて言えば……力の要素みてえな？」

苦笑混じりに言う海斗も、そこまでは説明しにくいようだ。
彼はあくまで英語が得意なので解説ができたのであって、実際その他の分野は不得意に入る。
らしい……本人曰く。

「一応皆個々に力はあるが、竜と俺と朱雀は格が違う。
とりあえず、こっちからな」

そう言って差し出したのは、右手であった。

「まずは全員の二つ名を確認……
まずは瀨さん、貴女は“聖女”。
次に聖槍院弟、お前が“聖刀”。
惺が“聖者”で麗華が“聖花”。
そして俺が“聖槍”…竜が“聖剣”だ」

海斗は一人ひとりを見回しながら、二つ名を次々に言っていく。
そして差し出している右手を見るよう促した。

「気付いた奴もいると思うが、瀨さんと麗華と惺は二つ名に武器の
名前がない。

……てか、竜と惺は気付いてたんだっただな」

「……ああ」

竜が惺を見つめる。

その視線に気付いた惺は、控え目に小さく頷いた。

海斗は小さく笑うと、関心したように大きく頷いた。

「さっすがあゝ…お前ら頭いいなあゝ」

「……お前も十分頭いいだろ」

竜が溜め息をつきながらそう言つと、まるで惚けたように海斗が視線を反らし、苦笑をもらした。

「……とりあえず、その“武器の名がない”っていうのが肝心なんだよ！」

「もしかして……」『“死神”に対抗できる力』って、名がついている武器のこと？」

「ピンポン！」

大正解だよ、麗華」

「なるほど……」

澁が考え深げに、左手で顎を支えながら呟いた。

「三人の二つ名は『“死神”に対抗できる武器』を指しているということね」

「なら、私たちは何なの？」

麗華が首を傾げながら不思議そうに海斗を見つめた。

「残りの三人は、多分『頭脳』さ」

「『頭脳』……?」

「所謂、武器を持つもののサポート、というところ?」

「ご名答です、瀨さん」

海斗が指を立てて片目をつぶり笑った。
所謂ウイंक。

「……なら、なされるがまま、ということはないんだな」

「ああ、“今のところ”はね」

竜は一つ笑いをもらしてから、力強いまなざしでその場の全員を見つめた。

決意の瞳が捕らえる。

「このゲーム、必ず“生き残る”」

有余期間終了
ゲーム、START。
。

九日目『血染めの鎌』

『我のこの葉を聞き、その姿を表に出せ』

漆黒の濡れたような髪が靡き、男は唄うように紡いでいく。
この葉は風に流され宙を舞い、目の前の黒い墓石に流れ込む。

『さあ…お顔を見せなさい』

押し殺すように笑い、まるで何かを誘い出すように右手を差し出した。

辺りの闇は静かに、その成り行きを見つめている。
それがどこか神聖じみた儀式に感じられた。

すると墓石が、小さく揺れた。

何かが剥いでて来るような、不気味な気配が辺りに漂う。

男 ロードはそつと、そちらに近寄った。
じやりと、革靴が砂を踏み締める。

オオオオオオオオオオオ...

黒い雄叫びが空気を震わせた。
獣より禍々しく、まるでこの世のものではないような、黒い雄叫び
だった。

ロードはその叫びに憶することなく、ただ手を差し出した。

『さあ...お出で。
ゲームが始まるよ』

クスクス笑うロードは静かに囁く。
黒い雄叫びをあげるモノはずるずる剥いでて来ると、空中に浮き出
た。

泥のような色の布を纏ったそれは、片手に赤黒い切っ先のついた細
い棒を掴んでいた。

鎌だ。

『……行け、“死神”』

ロードの一声と共に“死神”は四散した。
血に濡れた鎌を持って。

竜はいつも通り仕事をしていた。
ただ“いつも通り”と言うのは、若干違つのかもしれない。

小百合財閥の令嬢である小百合麗華が営む花屋『小百合・コユリ・』は、本日も賑わいを見せていた。平日であるのにも関わらず客が多いのには、それなりの理由があった。曆上、もうすぐ盆がやってくる。そのせいもあるのか、皆が我先にと花を買いに来ているのだった。そしてその店で働く竜にとって、今一番の働き時なのだが、どうも調子を狂わせる者達が来ているようだ。

「やっぱり竜君は上手ね……」

「竜って昔から手先“だけ”は器用だったからな」

「……………」

静かな怒りが竜を包み込んでいく。

「…………手先“だけ”ね」

6歳年下に笑われてしまった。あくまで無言を通し続ける竜だったが、次の一言が我慢の限界だった。

「神兄は手先以外は全て“不器用”だもんね。恋愛も」

「朱雀っ　！！」

竜は花を包んでいた手を朱雀に向け掴まえると、こめかみを握り拳で押した。

思いつきり、押した。

「か…神兄、いたっ痛い！！！」

「うるせえ…！」

兄貴の悪口を言う奴は許さねえんだよ！さあ、謝れ！土下座して謝れえ…！！！！」

いつもの冷静な竜とはまったくの別人に成り果てた本人を見て、その場の全員が硬直した。

そして海斗が一つ溜め息をつく。

「残念、聖槍院弟は地雷を踏んじまったな」

呆気にとられる皆をよそに、竜はその後数十分朱雀を痛めつけたとか…。

昼になって客が引き始めた頃、麗華は店を閉めた。

午前中客が多かったのは、午後から閉まるということもあつたかららしいが、竜はあまり浮かない表情をしている。

隣の朱雀は未だこめかみを押さえて呻いている。

我ながら情けない弟だ。

これくらいで唸って涙目で、痛がつて…贅沢な者だ。

自分はどんなに辛い思いをしたか、何も知らないくせに、幸せ者だ、朱雀は。

そう思い竜は軽く頭を振る。

別に被害妄想をするつもりはなかったのに、やはり今の朱雀が羨ましいのか、竜は微かに涙が込み上げてきそうになつた。

(やめよう…この道は、自分で決めた)

三年前、あの家を飛び出した時から…いや、“知ってはいけないこと”を知ってから自分の人生は決まっていたんだろう。

竜はそう思い込ませた。

もう余計なことを考えないように、“思い込ませた”。

竜は考え込んでいたので、隣の朱雀の視線に気付けなかった。

不審そうに見つめる弟の頭を軽く撫で、竜は何も言わずに皆の後を追つた。

頭に“奴”の声が聞こえたのは、それから数分たたないうちだった。

『御機嫌ヨウ…“聖なる剣”の持ち主よ』

竜は何も答えず、その声に耳を傾けた。

『コノ声ハ、アナタにしか聞こえていませんカラ…後程皆様に才伝えください』

竜は何も答えない。

『先ほど、“死神”が放たれマシタ』

「……………!!」

竜の肩が小さく揺れる。

一瞬にして身体中の血の気が引き、恐怖が込み上げてきた。しかし目の前を歩く仲間達にはバレたくない、竜は必死に押し殺した。

『今日中にハ、アナタ方に会いに来ると思いまス…』。

命を落とさぬヨウ……』

“悪魔”は押し殺すような笑い声を上げると、一瞬にして静まり返った。

竜の口からは、一瞬安堵の溜め息が洩れ出た。しかし。

『くれぐれも、才気をつけテ』

「神兄……!!」

「はっ ……!!」

朱雀の叫びに我にかえれば、竜はその場に立ち尽くしていた。額には汗。

「……………皆に、話したいことがある」

未だ震える握り拳を強くして、竜は早く“悪夢”が覚めないかと、一途に願った。

竜から“死神”のことを聞いてから、全員は言葉を失った。
いよいよゲームが始まるのだと、誰もが恐れを抱いた。

しかしいくらたっても“死神”は現れなかった。
何分、何十分、何時間…いくら待とうと気配すらみせなかったのであった。

「なら、今日はこれで解散な」

「……………大丈夫だろうか」

解散を促す海斗に、竜は不安な表情を浮かべて呟いた。現時刻は5時59分、後一分で6時になる頃だった。

結局“死神”は現れず、安心仕切った皆は家に帰ろうとしていた。

「なら、せめて一人では帰らないようにしよう」

「そうね…竜君の言うとおりだと思っわ」

澁が不安そうにそう言った。

いくら気配を漂わせないからと言って、こないとは限らない。
竜達は二手に別れて帰ることにした。

「じゃあ、また明日蒼井さん、澁さん、紅さん」

「神兄また明日ね」

「……では」

口々に別れの言葉を告げた麗華、朱雀、惺は、そのまま真っ直ぐと道を歩いて行った。

その場に止どまっていた竜達も、言葉を交わすことなく歩き始めた。

「でも…おかしいよな」

その言葉に海斗を見やる。

「だってよ、この“影踏”のゲーム管理者ってあの“異界人”なんだろう？」

竜は一瞬思考が停止し、そして納得した。
海斗が言う“異界人”というのは、ロードのことを指しているの
であろつ。
竜は頷いた。

「ああ…そう言っていた」

「なら…あいつが言うことは絶対だよな？」

「確かに…そう考えるとおかしいわね」

瀨が訝しげに眉を潜めた。
三人はそこで歩を止めた。
街の歩道を歩いていた筈が、辺りには人の気配が全くなくなっ
てい
た。
竜は息をのむ。

「どつやら…また空間が歪んだらしい」

「みたい…だな」

オオオオオオオオオオ……

どこからともなく声がした。

人とも、獣ともつかない雄叫びは、三人を恐怖に包み込んだ。

そして、微かに風にのって聞こえてくる、刃物が擦れる独特の音が近付いてくる。

そして、黒い雄叫びが目の前で聞こえた。

「あっ……マジかよ」

海斗が恐怖を帯びた、震えた声を出した。
竜は鋭い視線をそちらに向ける。

「“これ”が……“死神”」

鋭い視線とは裏腹に、焦りの声を上げた竜は、目の前に佇む《布》を見つめた。

泥のように黄ばんだ布は、何か禍々しく感じられた。

“悪魔”のロードとは違い、酷く汚れて見えた。

『オオオオオ……』

《布》 “死神”は、雄叫びを上げるだけだ。

黒く闇を含んだ声は、既に生き物ものではない。

「どうするよ……竜。」

「こっちはまだ『死神に対抗できる力』を使えないんだぜ？」

竜は答えない。

いや、応えられなかった。

恐怖に、闇に、絶望に、死に、身体が竦んで動かなかった。後方で海斗が叫ぶ。

「おい、竜っ！！」

くそっ…このビビりがっ!!」

海斗に手を引かれて思い切り走り走らされた。

足は無我夢中で動くのに、意識と心はあの場に置いたきりのような、不快感を覚える。

何かが違う。

何かが、違う。

逃げては、ダメだッ

竜の足が急に止まる。
いきなりのことに瀨と海斗は振り向いた。

オオオオオオオオオオオオ……

黒い雄叫びが辺りに響き、鋭い鎌が竜の視界に飛び込んでくる。
尋常じゃない速さに、反応ができなかった。
瀨の叫ぶ声が耳に届いた。

「竜君ッ……!!!!」

強い光が辺りを包み込んだ。

あまりに強い光だったので、その場の誰もが瞼を堅く閉ざした。海斗と瀨は手で光を遮り、何とか目を開けようとした。

「一体何が……あつ！」

瀨は僅かに開いた隙間から、少年の後ろ姿を捕らえた。先程まではシャツとジーパンという軽い服装だった。しかし今は違う。

足首近くまである長いロングコート、碧いジーパンの左足には竜の絵柄、耳から手首に繋がる鎖、そして背中に背負う蒼い剣。

瀨は何が起こったのか分からず、自らの目を疑った。

「竜……君？」

名を呼ぶが答えはなかった。ただ今分かることは、

竜の目の前に再度、鎌が振り下ろされそうになっていること。

竜はピクリとも動かない。

やっと目が開けた海斗は、目の前の光景に絶望した。

「竜ッ ……!!」

「竜君ッ ……!!」

二人の悲痛な叫びが木霊する。“死神”は何のためらいもなく、竜の影を切ろうとした。その時。

ガキンッ

赤い血塗れの鎌と、蒼い汚れなき剣が交わる。

竜はその場から全く動かず、後ろに伸びる自らの影を守った。

二人は安堵の溜め息をもらすが、“死神”は未だ諦めていないようだ。

再度襲いかかろうと、布から伸びる黄ばんだ細い腕で鎌を振り上げた。

『もっ、いい……』

辺りに響く声があった。

誰のものは分からないが、ロードの声ではなかった。

“死神”はその声に従うように、一瞬にして姿を消した。

その場に静寂が戻る。

竜が再度強い光に包まれた。

先程までの軽装に戻った竜は、疲れ切ったようにその場に座り込んだ。

「竜君ッ…大丈夫!？」

「竜ッ…!」

二人の駆け寄ってくる姿を見た竜は、安堵仕切った表情で意識を手放した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3721/>

影踏ーカゲフミー

2011年10月7日03時12分発行